

神美民話

【田道間守と中嶋神社】

但馬の神社は、天日槍を主人公として始まっている。「古事記」「日本書紀」「播磨国風土記」のそれぞれによって、伝承は少しずつ異なるが、新羅の王子天日槍が日本に聖皇がおられると聞いて国を弟にゆずって帰化した。

天日槍は播磨国に着いたが、諸国をめぐりみて自分の心になつた土地に住みたいと願って許された。

そこで天日槍は、宇治川をさかのぼって琵琶湖の北岸吾名邑に一時住んだが、若狭を経て結局但馬に住みつき、出石の太耳の娘麻多鳥(またお)を妻として但馬諸助をうみ、その子目檜杵、またその子清彦さらにその子が有名な田道間守だという。

田道間守は垂仁天皇の九十年二月、天皇の命を受けて海を越え、神仙秘境である「常世(とこよ)の国」に行つて、非時香菓(ときじくのかぐのこのみ)[橘のこ]を持ち帰つたが、その時は出発してより十年目の三月で天皇は既に亡くなつていられた。田道間守は悲しみのあまり、大和の西の京に近い所につくられた天皇の陵前にとときじくのかぐのこのみを献じて

「帝(みかど)の神霊(みたまのふゆ)によって、漸く帰つてくることができましたのに帝はもう、この世におられません。これから生き長らえても帝のましまさぬ今、何の益がありましよう」と、生きた人に申すように述べ号泣して殉死した。

豊岡市三宅にある中嶋神社の創立は甚だ古く、推古天皇の御代に田道間守の七世の孫にあたる三宅吉士、中嶋の公が祖先の田道間守を始めて此所に祭つたのに由来している。

中嶋の名は、その墓が垂仁天皇の御陵の池の中に中島のように浮かんでいるところから名づけられたという説もある。現在の本殿は正長元年(西紀1428年)に竣工し、二間社流れ造と言う類例の少ない様式を持つ上に、彩色を施し、細部の絵様彫刻の精妙、複雑である点、よく室町時代中期の特徴を示して国的重要文化財に指定されている。

中嶋神社 大垣三郎記 「豊岡民話 耳ぶくろ(昭和50年発行)」より抜粋

